

スポ女、集まれ！—「スポ女が輝く体育大」プロジェクト—

事業概要

今日、さまざまな分野において女性の参画が推進されている。本学においても、女性のスポーツ科学研究者の増加と、それに繋がる女子中高生の、進路選択に向けたスポーツ科学への関心の醸成のための取組を展開させる必要がある。

そこで、本事業では、『スポ女が輝く体育大』*をテーマに、招聘講師(ヨーコ・ゼッターランド氏<日本女子体育大学准教授>)によるミニ講演と、同氏と学内スタッフによるディスカッションを行い(令和4年2月5日実施)、それらを録画・編集したデータ(約1時間40分)を、女性の鹿屋市民から募った参加者に視聴していただき、アンケート調査に回答していただくという形でイベントを実施した。そして、その結果に基づき、今後の女性スポーツ科学研究者増とスポ女育成のための方策、男女共同参画推進のための課題等について検討を行った。

本事業の実施に際しては、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、開催方法を種々検討し、最終的には、対面によるサミット開催という当初計画に替えて、上述のように、参加者には録画視聴とアンケート調査という方法に変更して、事業を遂行した。参加者としては、当初は女性の鹿屋市民(高校生以上)30名程度を募集していたが、対面での開催から録画視聴に変更したことにより、最終的には、男性希望者も含め61名の方からご協力を得ることができた。

ご協力賜りました関係各位には、特に記して謝意を表します。

*本事業での「スポ女」とは、「する」「みる」「支える」のどの立場からでも、スポーツに関心のある女性のことをいう。

【担当：山田 理恵、国重 徹、日下 知明、仮屋 史恵、森 克己、高波 宗人、藤谷 雄平】

『スポ女が輝く体育大』プロジェクト

日時 令和4年2月5日(土) 14:00-16:30

場所 鹿屋体育大学 大学院棟3階 大講義室

対象 鹿屋市在住の女性(高校生以上)…28名

参加費 無料

概要
このたび、鹿屋体育大学では、サミット「スポ女が輝く体育大」を開催することになりました。このサミットでは、鹿屋市の女性市民の方々にご参加いただき、多様な視点・発想に基づいた意見交換を行い、今後の女性スポーツ科学研究者増と女子中高生の「スポ女」育成のための方策、男女共同参画推進のための課題について検討することを目的としています。講師として、ヨーコ・ゼッターランド氏にご講演いただき(online)、ミニ講演会の後、ディスカッションに御参加いただけます。

そこで、鹿屋市在住の女性参加者28名を募集いたします。この28名の方々は、「SJA 28」(エス・ジェイ・エー28 エンタインメント)(SJAは「スポ女が輝く体育大」の略)というグループ・メンバーとして、サミットにご参加いただくこととなります。ぜひともご応募ください。お待ちしております。

募集方法
本学のHP上で募集します(詳細はHPをご確認ください)。

申込み締切
令和4年1月25日(土) 17:00

問合せ先
山田 理恵 Tel.0994-46-4973 E:yamada@nifs-k.ac.jp
国重 徹 Tel.0994-46-4893 E:kunishige@nifs-k.ac.jp

講師 (online)
ヨーコ・ゼッターランド氏
1992年 バルセロナ五輪銀メダリスト
1996年 アトランタ五輪銀メダリスト
2011年 鹿屋体育大学博士課程修了
現在 日本女子体育大学准教授

*本イベントは、鹿屋体育大学の新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、対面での開催には「マスク着用」「手洗いの徹底」にご協力をお願いします。なお、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、オンライン方式での開催もしくは中止になる場合があります。

ヨーコ・ゼッターランド氏の講演とプロジェクト・メンバーとのディスカッションの主な内容

【ヨーコ・ゼッターランド氏の講演内容の要約】

- ・高校を卒業し、トップの社会人チームに入り、全日本チームの選手としてオリンピックで金メダルを目指すことも進路の選択肢の一つであったが、これからの時代のことを考え、当時早稲田大学で新設された人間科学部スポーツ科学科で、自らが取り組んでいる競技(スポーツ)を科学的、客観的視点から学び、磨き、一歩高いレベルに到達することを旨とする先駆者になろうと決めた。
- ・オリンピック選手になるという目標を実現するため、アメリカのナショナルチームの公開入団テストを受け、合格した。
- ・当時の日本と違い、アメリカのナショナルチームの選手のほとんどが大学を卒業していた。その最大の理由は、選手を引退したあとのキャリアが重要視されているからであった。アメリカで監督、コーチになるためには、最低大卒であることが必要であった。
- ・アメリカのチームでは、監督、コーチ、選手同士でも対等に意見を出したり、議論をすることが普通で、それに基づいてみんなでより良いものをつくり上げていくというスタイルであった。
- ・アスリートとしてのセカンドキャリアについてアメリカで真剣に考えた。その中で、選手としての時間は人生のほんの一部でしかないこと、今を大事にしながらかつなげることを念頭に日々取り組むことが重要であることを認識し、キャリアにおいて教育と教養の大切さを痛感した。
- ・アメリカのチームでは、女子チームには女性コーチやスタッフが雇用されており、在籍中に妊娠、出産を経て現場に復帰したり、妊娠中も可能な業務を続けることが普通であったが、この状況は現在でも日本のスポーツ界ではまだ少ない。

【ディスカッションの要約】

- (プロジェクト・メンバーから)
- ・ヨーコ・ゼッターランド先生と同じナショナルチームにいた選手たちのその後のキャリアパスはどのようになっているか?
 - ・海外の大学(高等教育)で、体育・スポーツ系を選ぶ女性はどれくらいいるのか?
 - ・ロールモデルを提示することは必要だが、有名な方だと予算的にも、日程的にも厳しい。たとえば、どのようなロールモデルが想定できるか?
 - ・アメリカの公的高等教育機関における男女の機会均等を定めた連邦法の修正法であるタイトルナインに類するものを、我々もこの地域で、例えば、鹿屋体育大学と鹿屋市が連携して提唱したいと思っているが、ヨーコ先生もその実現のためにご協力いただけないか。
 - ・鹿屋体育大学は、今後のスポーツ界の発展に向けて、特に男女平等のスポーツ界の実現を目指して、ヨーコ先生からご提言いただき、鹿屋市民の皆様にも追ってご意見をいただければと思っている。
- (ゼッターランド先生の回答から抜粋)
- ・当時のチームメートの大半は、指導者として何らかの形でバレーボールに携わっている。NCAAの大学チームでアシスタントコーチを経てヘッドコーチになった元同僚もいる。また、地元のスポーツクラブでコーチをしている方もいる。
 - ・私の知る非常に狭い範囲内の回答になるが、当時のチームメートに、いわゆる体育を主専攻している人はいなかった。政治科学や英文学など、スポーツ科学とは全く異なる分野を専攻している人がほとんど。スポーツ科学を専門にしていたのは私くらい。スポーツをしているのに専攻がスポーツ科学ではないということに驚いた。
 - ・女性がもっと輝く社会を実現しようといっても、女性が能力を発揮する場がなければ発揮することはできない。現状では、その場を女性が自分でつくらなくてはならないケースがほとんどで、それには相当な時間とエネルギーを取られる。女性自身がではなく、大学が、女性が自らの能力を発揮できるような場をできるだけ多く提供し、活躍の場の選択肢が豊富にある環境を生み出していくことが大事なのかなと思う。

総括と今後の課題

本事業を通して、男女共同参画社会における課題、スポーツ界におけるジェンダー平等について多くの示唆が得られた。

周知のように、今日日本では、女性の選手の競技力が急激に伸びており、その活躍は目ざましい。今後の日本のスポーツ界はどのような形で発展していくのか、またそのようななかで、鹿屋体育大学は、スポーツ界の発展に向けて何ができるのか、何をすべきなのか? 本事業の成果をふまえて、ダイバーシティとインクルージョンの推進に向けてどのような取り組みを進めていけばよいのか、継続して検討していきたいと考えている。

また、このイベントには、鹿屋市男女共同参画審議会委員の参加もあり、同委員からはこのような取組を今後鹿屋市と大学との連携で企画できないか、という要望もあった。コロナ禍で参加者は、録画視聴とアンケートへの回答という形での参加となったが、今回のような男女共同参画について考える機会を継続してつくってほしいという声も聞かれた。これらのことから、本学の成果を地域社会に発信し還元させることも求められていることが明確となった。今後は、鹿屋市と連携した地域のジェンダー平等の推進に向けた企画も提案したいと考えている。

なお、鹿屋市民から募った参加者からは、多様な意見が得られた。それらのアンケート結果の分析および考察については、紙幅の関係上割愛した。今後、学会等で発表し、機会を改めて紹介することとしたい。